

既読スルーは寂しいよ

「既読スルーは寂しいよ。」

今朝の一年C組の朝の会の話題です。細かいことはわからないのですが、昨日、一C担任のI教諭が「技術の作品づくりをした人は、昼休みに一緒にやろう」と、二年生の一部の生徒に呼びかけたようです。しかし、その日の昼休みには技術室にだれも来なかったということでした。彼は帰りの会で、その時の寂しさを話題にしたようです。

「昨日、『既読スルーは寂しい』という話をしたけど、そのとき私はどうしたらよかったのかな。」

I教諭は日を替えて、生徒たちに投げかけました。昨日は「寂しい」という思いだけで終わっており、それでは何も変わらないと彼は思ったようです。生徒たちは、「(来られない理由があるのかもかもしれないので)様子を見に行く」「(参加を)もっと呼びかける」というような、寂しい思いをしたI教諭からの積極的なアプローチが更に必要だという意見をつぶやきました。

I教諭は静かにそれを聞いていました。そして、自分が願っていることと、生徒たちが考えていることが一緒だと確信したようでした。

彼が願っていたことは、リーダーたちの働きは認めながらも、彼らにもっともっと積極的に仲間に関わってほしいということでした。呼びかけるときは仲間に正対し、熱い気持ちを伝える。何かを点検するときには、全員の様子や反応をしっかりと確かめた上で行う。ものごとを「ひととおり」で済ますのではなく、そこに熱い気もちを込めてほしいというのが、I教諭らしいところです。

そのときの一年C組の生徒たちの姿がすばらしいと、私は感動しました。熱い思いをもっているI教諭ですが、決して高飛車に語っているわけではありません。むしろ、笑顔を交え、フレンドリーに語っています。しかし、生徒たちは全員I教諭をしっかりと見つめ、頭が全く動きません。彼の念押しにも「はい!」というさわやかな返事が返ってきます。五分間の「先生の話」で大切なことを学んでいることがよくわかりました。

このときのI教諭には、「既読スルーは寂しい」が全くあてはまっていないようでした。それどころか、彼が伝えたい思いに生徒は聞く姿勢で応え、I教諭は気もちよく話すことができたように私には見えませんでした。

あなたの学級はどうですか。生徒と生徒、生徒と担任の間に「既読スルー」はありませんか。一度振り返ってみてくださいね。

(九月十七日 記)